

# 私達の教育改革通信

第301号 2023/9

お願い：教育改革通信はオープンメディアに移行します。編集会員及び協力会員になる方を歓迎します。協力会員は自己負担でコピー、またはEメールで友人・知人へ配布してください。

私達の教育改革通信が今後どう発展するか、皆で育てる方式がよい日本文化に成長することが望まれます。

発行人：西村秀美、先事館箕面〒562-0023 箕面市粟生間谷西 3-15-12

編集：先事館吉祥寺 海野和二郎〒180-0003 吉祥寺南 4-15-12；

先事館狭山 菅野礼司〒589-0022 大阪狭山市西山台 5-5, 2-1009；

先事館奈良 湯浅学 〒630-8101 奈良市青山 8-82；

先事館中野 茂木和行 〒165-0035 中野区白鷺 2-13-3-409

## 『東京好奇心』から『WONDER Mt. Fuji』へ

太田菜穂子

© 西野壮平



2020年4月7日、安倍総理から発令された緊急事態宣言により、NPOの発足から準備期間を含めると10年越しの展覧会プロジェクト『東京好奇心 TOKYO CURIOSITY 2018-2020 PARIS・BERLIN・TOKYO』のグランドフィナー

レ（会場：Bunkamura ザ・ミュージアム）の開催に赤信号が点灯しました。2019年末、中国・武漢で端を発した新型コロナウイルス。その後、この未知のウイルスは全世界を席卷するパンデミックとなり、東京オリンピック・パラリンピックを筆頭に、政治・経済のアジェンダ、あらゆる分野でのイベントを次々に中止や延期に追い込みました。人影が消え、まるでゴーストタウンと化したあの夏の東京。多くの人々にとっても強烈な記憶として残る TOKYO の風景だったのではないのでしょうか…

『東京好奇心』展は粘り強い協議を重ね、中止から延期への検討作業へと移行し、2020年秋になんとか開催に漕ぎ着けました。ただ、会場では厳しい人数制限やソーシャルディスタンスの確保等、新しい社会ルール下で、「好奇心を持って東京を見つめ直し、未来に向かってその可能性と新たな価値を創出する」という当初の目標を達成するには程遠い開催

となり、私の心に大きな空白を残すプロジェクトとして幕を下ろしました。

それから半年余りは、やり残したこと、届けられなかったメッセージが常に頭の中心に居座り、不完全燃焼から生じた無念な想いを拭い去ることができない日々を過ごすことになりました。不要不急の外出自粛が奨励され、リモートワークにシフトしたワーキングスタイルは、抜本的に“仕事をする意味”を考えさせる時間を与えてくれたのです。そんな日々の中で復活したルーティンは読書、それもビジネスに関係ない書籍と純粹に向き合う時間でした。

漱石の『心』、サガンの『ブラムスは大好き』、三島の『春の雪』。本棚の前で、かつて読んだ本を再び手に取り、改めて読み直す。流し読みの時があれば、じっくり最後のページまで読みふけてしまう…。不思議な開放感に包まれた穏やかな読書の時間は私を新たな思考と人生の選択へと導いてくれました。

そんなある日、本棚の片隅に永らくたたずんでいた一冊のペーパーバックに手をかけることになったのです。冒頭の数ページをめくり、私の目に飛び込んできたのは、次の言葉でした。

*“Together we laughed for pure joy”*

**「そのとき、不思議なことにわたしたちは、心の底からわきあがるよろこびに満たされて、いっしょに笑い声をあげていました。」**

レイチェル・カーソンの『The Sense of Wonder』に初めて出会ったのは、大学3年の秋。当時、世界は右肩上がりの経済成長の真っ只中で、自然や環境

との共生の大切さに少なからず気づきながらも、より豊かな暮らしや利便性に向かってひたすら疾走した時代でした。

私は小学校から高校までのミッションスクールでの12年に及ぶ規制で縛られた暗黒の季節が終わり、大学生として大きく開けた世界を前に、自分の意志で情報を選択し、1日の時間の過ごし方を決められる喜びを謳歌していました。

早稲田大学文学部・美術史学専攻、一学年の在籍者数は20名。専攻は同じくするものの、ほぼ全員がそれぞれの興味の下で異なるテーマに向かって勉学に励んでいました。個性的な勉学スタイルを実践するクラスメートは、目指すゴールは違えども志を同じくする“一目置くライバル”。彼らが提供してくれるさまざまな情報は、現在のようにSNSがない時代であって、とてつもなく貴重でした。感銘を受けた書籍や映画、展覧会情報を共有し合い、オリジナルな批評や見解が付加されたインフォメーションに、“外れ”はほぼ皆無でした。そんなある日、推奨されたのがレイチェル・カーソンの英語版ペーパーバック『The Sense of Wonder』でした。

ある秋の嵐の夜、わたしは1歳8か月になったばかりの甥のロジャーを毛布にくるんで雨の降る暗闇のなかを海岸へおりにきました。海辺には大きな波の音がとどろきわたり白い波頭がさけび声をあげてはくずれ、波しぶきを投げつけてきます。わたしたちは、まっ暗な嵐の夜に、広大な海と陸との境界に立ちすくんでいたのです。

そのとき、不思議なことにわたしたちは、心の底からわきあがるよろこびに満たされて、いっしょに笑い声をあげていました。幼いロジャーにとっては、それがオケアノス(大洋の神)の感情のほとばしりにふれる最初の間でしたが、わたしといえば、生涯の大半を愛する海とともにすごしてきました。にもかかわらず、広漠とした海がうなり声をあげている荒々しい夜、わたしたちは、背中がぞくぞくするような興奮をともにあじわったのです。

(上遠恵子訳 / 新潮社)

私自身、それまでも、それ以降も、何度も味わうあ

の“背中がぞくぞくするような興奮”が、これ以上の確に表現された情景はありませんでした。

海面を染める黄金の夕陽、しけの海を小さな連絡船で離島に渡った時の荒れ狂う波のうねりと飛

沫。顕微鏡で見た見事な雪の結晶。夏休みの夕方、部屋の柱で突然始まった蟬の羽化。見る見るうちに開花する月見草を見守った夕暮れの蚊取り線香の匂い…。幼い日のこれらの記憶は、その後に体験することになった古代遺跡や世界のマスターピースを前にした時、フラッシュバックのように私の脳裏に蘇り、あのぞくぞくする感覚に再び包まれている幸福感を噛みしめたものです。

「センス・オブ・ワンダー」、それは理由や解説を超えた“圧倒的な高み”からあたかもガイディング・スターのように、“今、ひたすら感動すること”の大切さを静かに諭す言葉でした。



©山内悠／富士山頂から(宇宙との出会う場所)

「自分の人生を生きること」の価値と意味、そしてその喜びを日々感じながら生きてこれた私の人生。学生時代から今日まで、こうして永きにわたりアートに関わる日々を過ごせてこれたことは、まさに奇跡と言ってもいいほど幸福だと思います。豊かな自然と独自の文化的風土を持つ日本に生まれたこと、そして、20余年に及ぶ世界各地での暮らし、そして旅することで知った多様な世界との出会いは、まさに「センス・オブ・ワンダー」が散りばめられた時間のタピストリーであったと、その短い言葉を前に改めて気付かされたのです、

失意に終わった2020年の『東京好奇心』展の苦い経験から立ち直り、社会全体に視線を向けることができるまで心身が回復したのは、2021年のクリスマスを目前にした頃でした。久しぶりに世界を見渡すと、コロナ・パンデミックは収束宣言が出ないまま、経済活動の再開へと舵が切られ、“With Corona”の時代へ突入。翌年2月に勃発したロシア

のウクライナ侵攻は世界の安全保障関係の常識を根底から覆し、その余波は東アジア、南アメリカ、そしてアフリカでの領土紛争や現状の国境線の侵害という“想定外の出来事”で埋め尽くされていました。さらにその間、一挙に進んだ地球規模の気候変動は、大規模な自然災害として世界各地の人々の日常を破壊している現実ショックを受けました。流動化する世界の勢力図における平和維持の難しさ、逼迫するエネルギーや食糧問題がもたらす物価上昇、急激な格差社会が生み出す反目や暴動、そして待ったなしの温暖化。地球の未来を脅かす課題が文字通り山積していることに愕然としました。



© Yulia SOKOVOREVA『羽衣』へのオマージュ

国連をはじめとする国際機関が機能不全となり、各国間の外交努力が不発に陥っている現在、

未来に向けて建設的な会話の端緒となる可能性が残されているのは、アートと文化の文脈しかないと思いついたのです。どんなに微力であろうと、無名であろうと、誰かが希望を託せる未来を創出する活動を起こし、それを世界の人々に“シンプルなコンテキスト”で語りかけることが重要なのではないかと。

私が「WONDER」という人間にすでに内在するシンプルな感覚を回復させる運動から始めることが、新しい未来への光になるやもしれないと考えたのは、レイチェルの『The Sense of Wonder』の、あの一節との再会のおかげ。今回のプロジェクトの立ち上げに際し、理屈を超えたインスピレーションと圧倒的なパワーが私の背中を押したことは間違いなく、私ができる行動とは、“展覧会という装置を使って少しでも未来をより良い方向へと向かわせる”対話の場をつくり上げることだと直感したのです。

2022年春に立ち上げた『WONDER Mt. Fuji』プロジェクト。そのスタートは誰かに守られているかのよ

うにスルスルと拓け、人々を「WONDERの大切さ」に導く“被写体”決定も実にスムーズでした。

#### 被写体の条件

- 1 それは、ゴールとする多面性・複合性(文化・科学・社会)を有していること。
- 2 それは、誰もが認識でき、具体的かつイメージしやすいこと。
- 3 それは、グローバルなプロジェクトとして国際的に広く認知されていること。
- 4 それは、日本発のプロジェクトの証となる日本を象徴する存在であること。

この4つの条件が整理されたところで、頭に浮かんだのが霊峰、富士でした。実はその頃、別のチャンネルから富士山をテーマとする企画案が私の元に持ち込まれていたのですが、富士山を“アイコン”として写真史的検証をするという旧来型の企画で、机の上の資料の山に埋れていました。

ただ、富士山に「WONDER」というキーワードを冠し、人間本来の“感動感覚”の回復を促し、“未来社会の創出”への思考に導くナビゲーターとするコンテキストにあてると、これ以上にふさわしい被写体はないと確信できました。

2013年、コミッショナーとして、日本の食文化の美しさと奥深さを伝えるべく、『L'Art de Rosanjin 料理の天才』展をパリ・ギメ東洋美術館で立ち上げた際も同様に、北大路魯山人を日本の食文化の美意識を読み解くためのナビゲーターとして位置づけたのですが、今回は“未来の新しい生き方”を考えるための道先案内人を富士山に演じてもらうことにしたのです。

早速、有識者、サポーター、信頼を置く優れた写真家たちへこの企画についてのサウンディングをしたところ、いずれもポジティブな反応が返って来ました。

東京での開催館の第一候補として考えた東京都写真美術館(TOP MUSEUM)の最初のアポ取りでは、本企画の応援をいち早く表明して下さった友人のIさんにお力添えをいただき、実際にキュレーション・チームに参加して下さったニューズウィーク日本

版のフォトエディターの片岡英子さんと共に第一稿の企画書を携えて美術館に伺ったのは、数日後のことでした。

副館長の林さんはエレベーター前までお迎えくださり、応接までご案内、企画をじっくり聞いてくださいました。

「久々に国際的なプロジェクトのご提案で、なんだかワクワクします」と、ご自身のポジティブな感想をその場で、おっしゃったのです。

そし異例としか言いようがないのですが、翌週早々に館から、具体的な検討に入るとのことで、希望会期についての問い合わせが届いたのです。

通常、権威を重んじる美術館は、受け入れの可能性を予感させるコメントは述べないことが暗黙のルールなのですが、率直な印象を語られた林さんの言葉に勇気づけられて、恵比寿を後にしました。そし異例としか言いようがないのですが、翌週早々に館から、具体的な検討に入るとのことで、希望会期についての問い合わせが届いたのです。

『WONDER Mt. Fuji』。会場はTOP MUSEUM（東京都写真美術館）、会期は2024年6月1日から7月21日までの41日間の開催。アドバイザリーボードは元文化庁長官、近藤誠一氏を座長とし、日本写真協会理事長・会長、青木良和氏、元日本芸術文化振興会理事長、茂木七左衛門氏、元在仏特命全権日本大使、木寺昌人氏、シャネル日本法人会長、リシャール・コラス氏をはじめとする国内外の7名の有識者によって構成され、国際的に活躍する17名の多国籍の写真家が参加。

キュレーション・チームにはテート・モダンに在職中、日本写真を研究テーマに押し上げ、Japanese Photographyの世界的権威でもあるサイモン・ベイカー、ヨーロッパ写真美術館（MEP）館長を迎え、ニューズウィークの片岡英子さん、元マガナムフォト日本事務所代表の小川潤子さんにはコーディネートでサポートいただきます。

プレスオフィスはニューヨークと東京の2拠点での多言語情報の配信とし、『WONDER Mt, Fuji』の第

1章、東京都写真美術館での開催に向け現在、準備を粛々と進めています。

昨年7月に国際文化会館で開催されたプレス発表を皮切りに、本年5月13日には笹川日仏財団の助成をいただき、パリ日本文化会館（MCJP）で講演会を開催。6月1日の“写真の日”にはカウントダウンイベントとして、日本外国特派員協会（FCCJ）での記者会見も開催しました。

『WONDER Mt. Fuji』プロジェクトはこれからいよいよ佳境を迎えます。最大の難関であるファンドレイジング、作品制作、空間設計、カタログ出版、広報活動、作品制作、権利関係、保険、契約等々、やるべきことは山積しています。

綿密に、プロジェクトをマネジメントし、世界に向かってさざ波を起す展覧となるよう全力で取り組みます。

2023年8月8日

『WONDER Mt. Fuji』チーフキュレーター

NPO 東京画 理事長・ファウンダー

『WONDER Mt. Fuji』展覧会ティザーサイト(英文のみ)

<http://wonder-mtfuji.com/>

## 神さんコラム 10—もみじ

神倉 力

9月になっても今年は暑さが残り、「秋が始まる」と言えないかもしれない。地球温暖化の急速な進行により、変化に富んだ日本の四季が危うくなり、春夏秋冬ではなく春と秋が短く夏と冬の二希になりつつある。それでもやはり、「春はさくら」「秋はもみじ」であろう。

「もみじ」と言えば、日光いろは坂の真っ赤なカエデ、乗鞍高原から奈川村へ抜ける林道両側のカラマツ林のオレンジ色の見事さ、裏磐梯の五色沼に映る色とりどりのもみじも忘れられないが、私にとっては北東北のもみじは格別である。八甲田山や、八幡平、奥入瀬溪谷のもみじも素晴らしいが、岩手県の盛岡から宮古へ通ずる宮古街道（国道106号）のもみじは天下一品で、他の追従を許さないと思う。

東北では春は一挙に来る。梅、桃、桜、レンギョウ

前々回は越後の龍上杉謙信、前回は中国地方を支配した毛利氏と、戦国大名と鎌倉の関係について書いたが、今回は、九州の戦国大名として有名な島津氏と大友氏の鎌倉との関係について紹介する。前回書いた通り、鎌倉の鶴岡(つるがおか)八幡宮本殿から東方500m程の台地の上には、毛利氏の祖毛利季光とその父大江広元との二つの墓が、鎌倉特有の岸壁をくり抜いたやぐら形式で並んで建っており、鎌倉市による説明板には、この墓は江戸時代(文政6[1823]年)に毛利家によってこの近くに作られたものが大正10年に現在地に移設されたものであると書かれている。

この二つの墓は向かって左が毛利季光、右が大江広元なのだが、実は広元の墓のさらに右隣にも全く同じ形式の墓があって、アクセス用の石段は季光・広元とは別になっている。その墓の主は島津忠久(ただひさ)と言い、上記の鎌倉市の説明板には、「島津忠久(?-1227)は鎌倉幕府の御家人で、祖母が頼朝の乳母だった縁で頼朝に重用され、平家追討の恩賞として南九州島津荘(しまづのしょう)の惣地頭に任命され、薩摩島津氏の祖となった」と書かれている。あの幕末の雄藩薩摩の島津家初代の墓がなぜこの鎌倉に?

頼朝の乳母というのは、NHK大河ドラマのタイトルにもなった頼朝死後の幕府を支えた13御家人の一人比企能員(ひきよしかず)の母で、比企の尼として知られ、夫の比企掃部允(ひきかもんのじょう)とともに、伊豆で流人生活をしている頼朝を密かに援助し続け、平氏打倒の蜂起を陰で支えた女性である。比企氏というのは、平安末期に武藏国比企郡(現在の埼玉県比企郡と東松山市)を領有していた豪族である。その比企の尼の娘である丹後の局と京の貴族惟宗広言(これむねひろこと)との間に生まれたのが忠久である。つまり忠久には鎌倉幕府御家人比企氏の血が受け継がれているのである。

忠久が島津荘の惣地頭になったのは、平氏が滅亡し守護地頭の設置が認められた1185年で、1189年には

が一斉に花開き、正に春の爆発という表現がふさわしい。ところが宮古街道では、麓から分水嶺のある区界(くざかい)まで春から冬へ変わる。麓では桜が咲いているが、だんだん、桃、梅となり、木々が葉を落として枯れ木になり、区界の上にそびえる兜明神岳は雪をかぶっている。分水嶺を越えると、その逆に行くことになり、麓は春爛漫となる。秋も同じ。もみじの麓から冬の区界へと上り、区界から秋の麓へと下がる。

特に宮古から内陸盛岡へ向かう時のもみじは筆舌に尽くしがたい。関東以西のように赤や黄の単色ではなく赤紫、薄紫、だいたい、ピンク、薄ピンク、茶、薄茶、緑、薄緑、黄緑など、あらゆる色で織りなす錦繡はどんな芸術家も甲を脱ぐだろう。閉伊川の谷が狭いから、見事に彩色された山が目の前に迫り、道路の曲折によって前に来たり、横に来たり。自然の織りなす造形美に言葉を失う。

もみじは、秋口の冷たさによって「揉みいづる」自然現象のこと。「もみづ」の名詞型が「もみぢ」となり現在は「もみじ」と書く。その中でカエデが最も鮮やかだから、カエデのことを「もみじ」というようになった。カエデ属の中にはイロハモミジ、オオモミジ、ヤマモミジなどの種類もある。

2007年後半のNHK朝ドラ「ちりとてちん」で米倉斉加年演ずる若狭塗箸の職人が「箸は塗りこめたもの以外は出てこない」と言っていた。若狭塗箸はアワビの貝殻や卵の殻、松葉を漆に塗り重ねた後、それを磨いて独特の模様を完成させる。磨くことによって塗りこめられた物が表に出て輝く。だから、塗りこめたもの以外は出てこない。

人間も同じである。生まれた時から学びの時期を経て、人生のいろんな場面での出会いや経験を積んで命に塗りこめていく。世の中のリーダーが普段は外見を飾って偉そうにしている、いざという時は「塗りこめたもの」以外は出てこず、化けの皮がはがれる。人は逆境の時こそ真正の姿が出てしまうものだ。どんなときにも「もみいづる」色を出し鮮やかな「もみじ」に染め上げるようにしたいものである。

頼朝に従って奥州藤原氏討伐に参陣、翌年の頼朝上洛にも付き随い、1197年に薩摩・大隅・日向3国の守護に任ぜられている。確かに重用されていたようだ。

島津荘とは、平安時代中期に太宰府の役人平末基（たいらのすえもと）によって日向（宮崎県）南西部（現在の都城市一帯）に開かれ、平等院鳳凰堂の建立者関白藤原頼通に寄進された荘園で、その後薩摩・大隅・日向3国にまたがる史上最大と言われる大荘園に発展したが、平氏の滅亡によって頼朝に没収され、実質管理者である地頭に惟宗忠久が任命されたのである。そして、その島津荘の名を自分の姓として島津忠久と名乗るようになったのである。

説明板にはまた、「島津家には忠久が頼朝の庶子であったという説が伝わっていて、江戸時代の安永8[1779]年に第8代薩摩藩主で島津家第25代当主である島津重豪（しげひで）が頼朝の墓に近いこの地に墓を作った」とも書かれている。この忠久の墓の造成時期は毛利の墓の43年前なので、元々この島津忠久の墓だけがあったところに、毛利の墓が後から隣に引越して来たということなのだ。そして前記のとおり比企の尼の娘丹後の局と京の貴族惟宗広言との間に生まれたのが忠久だというのが史実なのだが、島津家に伝わる史料ではこの惟宗広言が源頼朝に置き換わっていて、丹後の局は正室政子の嫉妬を恐れて鎌倉から逃れ、1179[治承3]年の大晦日に大阪の住吉大社の境内で大雨の中狐火に守られながら忠久を出産したことになるのだそうだ。

鹿児島市の広大な島津家の邸宅跡地の一角に鎮座して薩摩藩歴代藩主を祀る鶴嶺（つるがね）神社の境内には、源頼朝公御石塔という大人の背丈よりやや小さい石造五重の塔があり、毎年頼朝の命日に慰霊祭が行われているという。その塔の傍らに建つ石碑には、鎌倉市民有志による次のような文章が記されている。

#### 遷塔の記

正治元年[1199]に没した源頼朝公は、持仏堂であった大倉山麓の法華堂に葬られた。幾星霜の後、江戸時代にはその跡を残すのみとなり、安永年間(1772-1781)島津家第二十五代島津重豪公はそこに立ち、五輪塔が建つばかりの荒廃ぶりを悲しみ、玉

垣を新造し、墓塔には勝長寿院から多層塔を移して墓所を再興した。平成の世に至り、心無き者が墓塔を破壊し、修復のために雛形塔を試作し、検討の上、旧に復した。頼朝公没後八百年を記念し、墓所再興の恩義ある鹿児島島津家に雛形塔を寄贈して、永くその恩に報いたいとする鎌倉市民有志の声が高まり、宗家島津修久氏のご快諾をえて、鶴嶺神社に源頼朝公墓所再興報恩塔として、玉垣を添え、遷座するものである。

平成十一年八月吉日

#### 鎌倉市民源頼朝公墓所再興報恩之有志

文中の勝長寿院とは重豪（しげひで）来訪当時頼朝の墓の近くに存在した大寺院で、平成の頼朝公墓塔破壊事件とは、平成元[1989]年3月8日未明に五重の塔の上部2段が地面に落とされた状態で発見された事件のことである。頼朝の墓は忠久の墓から直線距離でほんの80mほど鶴岡八幡宮寄りの所にあるので、要するに鎌倉の島津忠久の墓は、江戸時代の薩摩藩主島津重豪による頼朝墓所再興の際に、頼朝の墓の隣接地にあたる現在地に建てられたものなのである。鎌倉と鹿児島は思いがけず強い絆で結ばれているのだ。

鶴嶺神社の隣にある島津家運営の博物館「尚古集成館」のHPによれば、初代忠久から数代の間は島津氏は鎌倉に在住していたが、元寇(1274, 1281)の時(島津当主は3代久経)に九州に領地を持つ御家人が優先的に動員されたため九州滞在が多くなり、室町時代の初め5代貞久、6代氏久の頃に薩摩に定着したという。

隣り合う互いに相似形の三つの墓は、幕末のずっと前から薩長同盟の素地がこの鎌倉の地で醸成されていたことを静かに物語っているのである。

最後の太友氏であるが、これは平安時代末期から鎌倉時代草創期に、太友氏初代の太友能直（よしなお 1172-1223）が母の生家の所領であった相模国太友郷（神奈川県小田原市北東部）を相続してそこに住み太友姓を名乗ったことに始まる。能直は1189年の奥州藤原氏征討に頼朝警護の近習として従軍するなど、頼朝の側近として重用され、父の死後母の妹の夫であった中原親能（ちかよし）の猶子（ゆうし：改姓しなくてもよい名義上の養子）となってその所領であった豊後国大野荘（大分県豊後大野市）を相続した。中原親

## 生成 AI が予感させる新しいメディアの世界

校條諭

### ◇プラットフォームの“毒饅頭”

1995 年はプロバイダーの登場によって、一般の人がインターネットを利用できるようになった年で、インターネット元年と呼ばれています。その年、日本の三大新聞は、いち早く記事の一部をネットで発信し始めました。朝日の「オープンドアーズ」と「アサヒコム」、読売の「YOMIURI ONLINE」、毎日の「JamJam」(翌年 AULOS)です。

そして、翌 1996 年、Yahoo!ニュースが始まり、三大紙や地方紙は順次 Yahoo!向けに記事を配信するようになりました。当時の新聞社の判断について“毒饅頭”を食ったと言われることがあります。新聞社が Yahoo!の“下請け”になる道を開いたという意味です。まだ紙の新聞が激減するというような危機感がなかったこともあり、新しいメディアにコミットしておこうというくらいの軽い気持ちで記事を提供しはじめたと言われています。

ただ、多くの新聞社の動きを横目に、日本経済新聞だけは、いまだに Yahoo!に記事を配信していません。日経電子版は有料デジタルの購読数約 87 万 (2023 年 7 月) でトップに立っています。(ただし、この数年伸び悩んでいますが、2 位の朝日新聞デジタルの有料購読数約 30 万を依然引き離しています。)

### ◇ニュースメディアに接近するプラットフォーム

昨今、特に海外で、ニュースのパブリッシャー (新聞社、通信社、放送局、ネット専門ニュースメディア、フリージャーナリストなど) とプラットフォームとの間の緊張関係が高まっています。オーストラリアや EU、そして最近ではカナダが Google などプラットフォーム企業に、ニュース記事を適正な価格で買うよう政府が圧力をかけています。それに対して、Google とメタ (旧 Facebook) はニュース配信を止めると表明するなど綱引きが続いています。

### ◇ChatGPT 登場、急普及

ところで、そうした折、2022 年 11 月に、オープン AI 社の AI サービス ChatGPT が公開されました。これ

能は前回の毛利氏の中で述べたとおり大江広元の兄で、鎌倉殿の 13 人の一人として主に京に在住して朝廷と幕府の仲介の任にあたった。能直はその後豊前・豊後守護兼鎮西奉行、筑後守護などを歴任し、京都で死去した。大友氏はその後も鎌倉幕府の御家人として、島津氏と同様九州の抑えの要となり、元寇後 3 代頼泰の時に豊後国大野荘に定着した。そしてキリシタン戦国大名として有名な 21 代大友義鎮 (よししげ: 1530-1587、1562 年出家して宗麟 [そうりん]、1578 年キリスト教を受洗してドン・フランシスコ) の時に豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後の九州北西全域を支配して最盛期を迎えるのである。

以上のように、戦国時代に中国と九州を分け合った 3 大名の元はすべて源頼朝に仕え鎌倉やその近郷に居を構えた鎌倉幕府御家人だったのである。

ちなみに付記するが、前回の記事で触れた毛利元就の三男隆景が養子に入った小早川氏も、実はその始祖は平安時代末期から鎌倉時代初期に相模国早川荘 (はやかわのしょう: 箱根権現の荘園。現在の小田原市内を流れて相模湾に注ぐ早川と酒匂川の間一帯。JR 小田原駅周辺部) の管理者として荘内の小早川村に館を構えていた土肥遠平 (どいとおひら) という鎌倉幕府御家人とその子景平が、その地名を取って小早川姓を名乗ったのが始まりなのである。遠平の父土肥実平 (さねひら) は相模国土肥郷 (現在の神奈川県湯河原町) を本領とする武士で、頼朝の蜂起から平氏追討に参戦し、実平・遠平父子はその功により平氏滅亡後に安芸国沼田荘 (ぬたのしょう: 現在の広島県三原市) を賜り、頼朝死後の幕府内権力闘争 (1213 和田義盛の乱) に敗れた後、遠平以下の一族が安芸に移住して安芸小早川氏となった。その 300 有余年後毛利家から養子に入って家督を継いだ智将小早川隆景には子がなく、その養子の秀秋 (関ヶ原の戦いで西軍から東軍に寝返って東軍を勝利に導いた) にも後継ぎがなくて小早川家は断絶するが、明治になって毛利宗家の計らいで男爵家として再興されることになるのである。

このように、鎌倉は江戸幕藩体制へとつながる武家の勢力分布の変遷に深く関わっているのである。

は、「〇〇について教えて」と尋ねると、たちどころにわかりやすい文章で回答してくれるというので、またたく間に全世界で使われるようになりました。これまで Facebook やツイッターなどが登場したときと比べて桁違いに早いスピードで登録ユーザーが増加しています。

ChatGPT についての解説や使い方などの本・雑誌が次々に発行され、ChatGPT 狂騒曲とでもいうような状況が続いています。Google なども対抗製品を発表、AI の急速な発展、変化に、多くの国で期待と不安が高まっています。ChatGPT の GPT というのは、Generative Pre-trained Transformer の略で、生成的な、事前学習された、深層学習モデルというのが直接の意味です。現在 GPT4 というバージョンまでできています。

これはチャット（対話）による問いかけに対して、自然な文章で応答するサービスです。対話ができ、読みやすい文章で回答できるのは、**大規模言語モデル (LLM)** という原理によっています。かつての第1次（1950～60年代）、第2次（1980年代）の AI ブームのときは、コンピューターに論理モデルを組み込もうとしたり、特定の分野の専門家の知識を覚えさせようとしてきました。そのタイプの AI も将棋の例を思い出すまでもなく、以前からいろんな場面で使われています。

それに対して、GPT の場合は、論理でなく、気の遠くなるような量の既成の文章を読み込ませて、たとえば「雨が」と来れば、次は「降る」になる、あるいは「やむ」になるといった確率がどのくらいかという**統計**をとって、大規模言語モデルとしてストックしているわけです。さらに、文章で質問をされたときに、どう回答するかという学習を加えて ChatGPT ができあがりました。もともと組み込んである論理に当てはめて答えるのではなく、問いに従って“もっともらしい”文章の回答を「生成」する AI です。

ベースは大量のテキストの**深層学習**によっていますが、プロンプト（問いかけ、指示）の記述によって、画像を生成させたり、エクセルでは手に余るようなデータ処理やグラフ表示ができたりします。

#### ◇プラットフォームが抱いた危機感

この ChatGPT の急速な発展、普及ぶりを見て、Google のような検索エンジンを提供しているプラットフォーム企業が危機感を覚えています。つまり、ChatGPT に知りたいことを尋ねれば、Google の検索ページを開かなくてもすんでしまう可能性があるからです。たとえば、「初めて京都に行くので、主な名所を3日間で回る計画を立てて」と頼めば、1日目どこどこ、2日目どこどこというように案を示してくれます。

ChatGPT は、つじつまの合う文章で答えますが、実際には事実合った正しい答えをするとは限りません。伊藤譲一さん（元 MIT メディアラボ所長）は、ChatGPT は「知ったかぶりの友人」と思えと発言しています。それに対して、マイクロソフトの検索エンジン Bing（ビング）は ChatGPT と連携して BingChat というサービスを提供しはじめています。ChatGPT と同じように文章で問いを投げかけると、Bing で検索結果を示すというものです。対話型の AI と検索エンジンの強みを合体させる意図で作られていますが、筆者はまだ未成熟の印象を持ちました。

#### ◇プラットフォームがメディアに接近

以上のような動向の中で、プラットフォーム企業がパブリッシャー（メディア）に接近しつつあります。

ChatGPT を提供している OpenAI 社は、世界的通信社の AP 通信と提携しました。AP の持つテキストベースの記事を、OpenAI が大規模言語モデルの学習のために使えるようライセンス供与するとのこと。AP は、引き換えに OpenAI の専門知識と技術を利用できることとなります。この動きの背景に、OpenAI や他の生成 AI 企業が、インターネット上の文章データを、作成者の許諾無く勝手に利用していると批判されていることがあります。実際、ニュースメディアの記事を勝手に学習させないよう規制する必要があるとの声も高まっています。

また、Google はニューヨーク・タイムズなどの有力報道機関に対して、AI を使ってニュース記事を作成する製品を売り込んでいます。しかし、その能力については、まだ疑問が残るとの声もメディア側から上がっ

ています。これらの動きは、いずれも複数のメディアが2023年7~8月に報道したもので、今後まだ、思いもよらない事が起きるかもしれません。なお、日本のYahoo! は今のところ表だった動きを見せていません。

#### ◇記事づくりの助っ人

『チャット GPT vs. 人類』(文春新書)の著者平和博さん(元朝日新聞記者、桜美林大学教授)は、ChatGPTは、いわばインターンだと思って活用したらよいと言っています。適切な使い方さえすれば、取材準備から記事作成までのプロセスの各所において、優秀な“インターン”としておおいに役立つことでしょう。

記者が取材において収録した音声の文字起こしをすることは、専用ソフトの進歩により、かなりうまくできるようになりました。そのテキストファイルを、ChatGPTに読み込ませると、話のまとめりと分割するとか、そのそれぞれに見出しをつける、要約をつくるといったことがすぐにできます。複数の取材情報を1本のレポートに集約するようなこともさせられます。その場合、取材が現場で対面で行われたのなら、そこで得た実感ないしニュアンスをもとに、AIのアウトプットに修正の手を入れることもできるでしょう。

筆者が実際にChatGPTを利用して見てわかったのですが、要約もさることながら、子ども向けにやさしく書き直してほしいという要求にかなりうまく答えてくれました。

読者からのたくさんのコメントの整理にも使えそうです。Yahoo!ニュースを見ると、ニュースによっては膨大なコメントがついていて、ほとんど見る気もしないということがしばしばあります。まっとうなコメントも、多数のゴミのようなコメントの中に埋もれてしまっています。そんなこともあって、Yahoo!にニュースを配信している新聞社の自社サイトでは、通常、読者が記事にコメントできるようにはしていません。しかし、AIを使えば、“まっとうな”コメントを自動的に選び出して、趣旨別に分類したり、キーワードを抽出したりすることができるでしょう。せつかくのデジタルなのに実はむずかしかった双方向のニュースメディアが実現しやすくなります。

ところで、「コタツ記事」という言い方があります。取材などせず、よそのサイトからの切り貼りで、人目を引くテーマの記事(たとえば健康法など)を作ってアクセス数をかせぐ、広告収入ねらいの記事のことで。懸念されるのは、ChatGPTを使えば、そんなコタツ記事を膨大に作り出すことができるという点です。

コタツ記事のライターではない、記者の「命」は、今後いくら技術が発展しようが、現場に出かけて行って、取材対象に身体的に向き合うところにあるでしょう。この**身体性や現場性**というのがAIにはできない、記者の最後の砦だと思います。

#### ◇データジャーナリズム

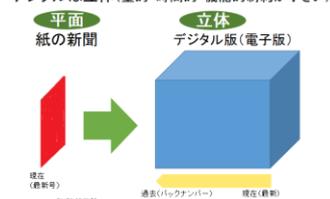
昨今、調査報道の分野では、**データジャーナリズム**という取り組みが目立ちます。このほど**調査報道大賞**(報道実務家フォーラムとスローニュースが主催)で部門賞を取った朝日新聞の「**みえない交差点**」はまさにその例です。警察庁が公開している交通事故に関するデータの通常使われてない部分をさぐって、新しい事実を発見したものです。

また、軍部独裁の国における抗議運動の参加者の死が、軍の発砲によるものだという事実を、**ベリングキャット**という国際的なグループが、ニュースやSNSにアップされている映像の断片をつき合わせて解明しました。これも一種のデータジャーナリズムと言えましょう。この類いは、特に**OSINT**(オシント、Open Source Intelligent)と呼ばれています。

これらのデータジャーナリズムにおいて、AIが役割を発揮する余地はおおいにあると言えます。その際、AIを活用したニセ映像なども今後増える一方と思われるかもしれませんが、そうした困難を乗り越える努力が続けられています。

#### ◇ストックのフロー化

本誌283号で、私は、紙の新聞を平



面とすると新聞のデジタル版は**立体**であると言いました。立体であるがゆえに、量的、時間的、機能的な制約から解放されます。ですから、たとえば前記の「みえない交差点」

の連載記事は、現状でも検索機能で探してまとめて見ることができます。

しかし、AI を使えばそれ以上のことができるようになります。たとえば新聞社が、AI に自社の記事全体を大規模言語モデルで学習させておき、その新聞専用の ChatGPT を読者に使わせるというサービスをつくることができます。すると、読者は過去の記事をもとに、さまざまな組み合わせで、新しい価値を持つ記事（ひとまとまりのコンテンツ）を各種作り出すことができます。音楽ストリーミング風に言えば**プレイリスト**です。これは**ストックのフロー化**であり、また、**ワーカー・マルチユース**の考え方だということもできます。

私が考えた一例として「調査報道“再発見”」というような企画が考えられます。過去の調査報道で筆者が思い出す筆頭は、20 世紀の最後の年の 2000 年 11 月 5 日に毎日新聞が報じた**旧石器捏造**の大スクープです。このあと歴史教科書までが書き換えられる大きな社会的影響がありました。

発覚の 20 年後、同紙はいくつかの関連記事載せています。その例のひとつは、石器分析の基礎をどう再構築するかと問うている記事で、もうひとつは、町おこしの観点からの記事です。これら以外にも、この 23 年間に、捏造発覚の余波に関する記事がたくさん載っています。ChatGPT を使えば、そのすべての記事を読み込んで、1 次的な整理ないしまとめがたちどころに返ってくるでしょう。

当然ながら、読者向けサービスという以前に、編集者それぞれの発想によるさまざまな切り口で過去の記事を再編集して、興味深い“プレイリスト”を生み出すことも可能です。このような新たな価値を新聞の有料デジタル版が持つようになれば、紙の減少を補う読者拡大にもつながるのではないのでしょうか。

#### ◇学びを支援するパーソナライズを

朝日が「見えない交差点」をまだ発表していない頃に、「警察庁の発表統計には信号のない交差点での事故が入ってないのでは？」などとあらかじめ注目していた人がもしいたらすごいです。普通は具体的に見せられて初めて、これは知るべき重要な記事だという感

想が生まれてくるものでしょう。

自分にとって得意な分野とか、特に興味を持っている分野や株価情報などの実利的な関心分野は別ですが、そもそもニュースの価値は、それによってハッとさせられて目を見開かされたり、社会的課題に気づかされたりすることにあるのではないのでしょうか。

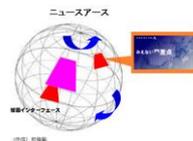
さらに、それをもとに、記者にコメントを返したり、誰かと意見を交換する、あるいは自分なりに考えを深めていくことが考えられます。そのときに、ChatGPT のような AI ツールが役に立つ可能性があります。それは、いわばニュースをもとにした**学び**が生まれるということです。ニュースサイトのパーソナライズサービスは、読者の視野を広げる学びを支援するものであってほしいものです。

#### ◇スマホを超えたインターフェイスを

スマホの小さな画面で何でも見るのが標準的なスタイルになってしまっていますが、情報との接し方はもっと多様になっていいのではないのでしょうか？

私が考えたのは、**VR 技術**を使ってニュース記事を球面に貼り付けるという方法（**ニュースアース**）です。その日その日のニュースが、大小おりまぜて紙面ならぬ球面に表示されて、そこからニュース本文や動画、さらに過去の関連記事、あるいは参考図書情報、執筆者のプロフィールやこれまでの執筆記事などを構造化してリンク表示できるというものです。地表に近い層とか、マントル層などと層区分をしてもいいかもしれせん。

日頃よく見ている目当てのテーマにさっと直接行くこともできるし、また、任意の方向に球を回してどこかで止めると、出会ったことのないテーマの記事と新鮮な出会いが生まれるでしょう。



アップルが発表した **Apple Vision Pro** というゴーグルは、バーチャルな大画面を目の前にして、上記のニュースアースを見るのに適しているように思われます。

#### ◇記者と読者に問われるもの

ChatGPT のような生成 AI をうまく活用する基本は、よい問いを発することです。それはすぐれた記者はま

すますすぐれた記者になり、深く考える読者はますますそういう読者になるということです。そんな記者と読者が出会い、対話ができるメディアをつくっていききたいものです。

## 異界・現世・人と中世の芸術 4

### 風野一夕

#### 【余情の歴史的意味】

能楽の世界で「余情」はどこへ行ったのか？ ここで能面に注目したい。今日の日常語で「能面のよう」といえば無表情のことである。鑑賞する側からいえば、能面によって登場人物の類型はわかるが、「そのときその場面」での表情はわからない。それぞれの鑑賞者が想像する表情を無表情の能面の上に重ねて見ることになる。百人の鑑賞者が百様の表情を考えることがあってもいい。無表情の能面は無限の表情を持っているのである。結局、さまざまな鑑賞者が作品の間近くに引き寄せられることになる。鑑賞者が演者に引き付けられ、自然と創作に加わるともいえよう。無表情の面は無限の表情を持つ点で「余情」に富んでいたといえる。

面をつけず素顔のまま演ずるのを「<sup>ひなめん</sup>直面」といった。世阿弥は『風姿花伝』の中で、直面についてこう述べている

「直面は、実力のあるものがやらないと見られるものではない。わざと表情を作ってはいけない。振舞、風情は作中の人物らしくなくてはならないが、顔は自分本来のままつろわぬのがいい」。

顔も能面同様に考えたのである。

能楽の言葉には和歌の引用も多く、和歌的世界を広げ、象徴的表現を用いた。舞は動きのすべてが象徴的表現といえる。言葉でも舞でも能面と同じように、鑑賞者それぞれが独自に解釈し、作品の間近くに迫ろうとしたことだろう。

能楽は、同じ作品の公演であっても「毎回創作し、その都度、結果を出す」ものでもあった。そこで鑑賞者が作品の間近くに迫るのを待つのではなく、むしろ鑑賞者が間近くに迫れる条件を整えていたといえる。

世阿弥はさらに公演のたびに鑑賞者、作者、作品が

好ましい共感・共鳴の響きを上げるように考えていた。

『風姿花伝』の中で、大略こう述べている。

「昼の気は陽気だからすべてを静めるような陰の能を提供せよ、夜の気は陰だから浮き浮きした陽の能を提供し、人の心が花めくようにせよ」

どうも私がこのように要約してしまっただけでは真意が伝わりにくいだろう。肝心な部分をそのまま引用する。

「そもそも一切は陰陽の和するところの境を成就とは知るべし」

「陰陽の和するところ」とは鑑賞者、作品、作者の間で共感・共鳴が起こり得る状態のことであろう。「成就」とは「成功」ということである。

中世の能楽関係者は十分に和歌の世界を学んでいた。和歌の世界で「余情」が尊重されていることを知らなかったわけではない。ただ上記のように見ると、能楽の世界ではすでに「余情」を前提にした様々な工夫がなされていた。あえて「余情」を論ずることは、なかったのではないか。

「余情」は日本の今日の演劇、テレビ、文学の中にも息づく。それだけではない。世界中の創作活動の中に現に在るのではないか。例えば最後にさりげない一言で締めくくる作品がある。さりげないけれど鑑賞者の側は、全編を通して考え直し、なお何か深い意味がありそうに思う一言である。そこには当然「余情」が漂う。中世に和歌、能楽の世界の人々が、「余情」に気づき、「余情美」として芸術上の美意識のうちに定着させたのは世界芸術史上、歴史的意味があるといえよう。

#### 【現世を見つめた人々】

創作者がその想念の内に抱く異界には、場所の制約も時間の制約もない。その意味で異界は「無次元」の世界であり、「無限の時空」である。中世の創作者たちは異界との取り組みを続ける中で、それぞれが無限の時空を抱えるようになった。無限の時空の中で現世や現世の人、さらに「私」は極めてちっぽけなものに見えたことだろう。

それによって創作者たちは縮んでしまったか？ いや、中世の初期から縮まない人たちがいたのである。確かに「現世」も「現世の人」も「私」も、ささやかな存在ではあるが、それぞれに価値や意味があると感

じた人々である。『方丈記』の鴨長明、『徒然草』の吉田兼好を上げよう。

『方丈記』の「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」という書き出しは長明の想念の中の異界である。川の場所・時間はどこでもかまわない。その点で無限の異界といえる。ただこれに続けて長明は「世の中にある人と栖すまと、またかくのごとし」と述べて、すぐに現世の話に移る。長明が実際に見聞した戦乱、飢饉、火災、水害、風害、大地震などを語る。確かに大変なことの続く現世であった。以上が『方丈記』の前半である。

後半は「この世の中は住みにくい」と感じた長明が、自分の選択した暮らし方を語る。

三メートル四方(方丈)の小屋である。阿弥陀の絵像を安置し、その前に法華経を置く。南に簀の子を敷き、東の端には蕨の穂を敷いて寝床とした。

『方丈記』は一般に無常観を述べたものだとして解説される。前半からはそのような読み方もできる。しかし、後半にさような印象はない。さらに「さびしきすまい、一間の庵、みづからこれを愛す」と満足している。

また世の中の人々が「俗塵に馳する事をあはれむ」(あくせくと心身を労していることを気の毒に思う)とまで言い切る。私は『方丈記』に無常観よりは、長明の現世を見る目の確かさを感じる。さらに長明の自在で強靱な精神に目を向けたく思う。

『徒然草』は最後(第243段)にこんな話が載っている。吉田兼好が八歳のとき父に「仏には何が成る？」と尋ねた。父が「仏には人が成った」と答え、問答が始まる。

「人はどのようにして仏になる？」「仏の教えによってなる」「教えなされた仏には、何が教えなされた？」「それもまた先の仏が教えなされた」「教え始められた第一の仏はどんな仏か？」。

ここで父は「空より降ったか、土より沸いたか」といって笑った。

兼好は「自分は八歳のとき、すでに想念の中にこんな無限の時空を抱いていた」といいたげである。やや得意になって記しているようにも見える。

兼好は現世のさまざまな人々について、その人々の

存在する意味や価値をきちんと記した。木登りの名人といわれる男は、木の上の作業者がだいぶ下まで降りてきたとき初めて「注意しろ」と声を掛けた。兼好は「安全な所へまで降りて来たとき、なぜ声を掛けたか」と聞いた。名人は「高いところにいるときは本人が恐れている。安全な所へ来た時こそ過ちを起こす」と答えた。兼好はこれを名言と感じ、『徒然草』に記した。

双六の名人には勝つための極意を聞いた。「勝とうとして打ってはダメだ。一目だけでも遅く負ける手を打つのだ」という名人の話には「身を治めるにも、国を治めるにも、必要な考え方だ」と感じた。

家の作り方について数人の人々が話し合っていた。「家は夏向きに作るのがいい」「深い水より、浅く流れる水が涼しい」「天井が高いと冬寒い」など、さまざまな発言を兼好はすべて記した。

『徒然草』についても仏法の無常観との関わりに注目する説があるが、私はむしろ、兼好が当たり前の人々の、当たり前の暮らしを見つめ、そこに「価値」を見出していたことにこそ注目すべきだと思う。

中世の伝統的芸術は確かに異界に目を向け、異界を伝えようとした。そのとき中世人は現世をどうでもいいと考えたわけではない。長明、兼好のように現世や現世の人、そして現世の「私」を見つめる人々もいた。長明は現世の中での「私」の居場所をきっちりと決め、兼好は現世の様々な人々に「価値」を見た。

『徒然草』は中世にはあまり注目されなかった。江戸時代に版本となってから広まったという。兼好が著してから300年以上経てからである。それだけ兼好が進んでいたともいえようか。

長明も兼好も歌人であった。ただ現世の戦乱や災害の惨酷さ、あるいは現世に生きる人々の多様さを伝えるには、歌の世界には制約が多過ぎた。そのため歌の外に表現の場を定めたのではなかったか。かように現世を見つめた人々がやがて次の近世文化を開く一つの力になるのである。

他の芸術分野でも現世を大事にしようとする人が徐々に増えた。例えば連歌の分野ではどうか？

(続く) (編集 茂木)